

4つの鍵～対話・重層的でフラットな関係性・人材・地域

聴講生 角 響子

堀田先生のお話を聴かせて頂くのは今回で3回目だったのですが、田中滋先生の植木鉢を想像しながら聴講させていただいておりました。

実は、あの植木鉢の苗にお花を咲かせる為には、ケアプランなど不要となるくらいのマネジメン力の成熟が求められているのではないかな・・・と普段から妄想している私、今回のご講義ではその具体的法論を紐解く鍵をいくつも発見しておりました。

一つ目の鍵～対話～

もうすでに小笠原文雄先生のトータルヘルスプランナーや武藤正樹先生方の医療介護連携士でも実証されていますが、少なくともご高齢の方々の人生の最終段階をお供させて頂く介護現場に求められている真のニーズとは、ケアプランという名の証明書類でなく、医師の診断書類の厳密性でもなくケアに関わる当事者皆で合意形成を図る力。

堀田先生のお言葉で言う「本来の人と人とのゆたかな関係性を取り戻すための対話、すなわちみんなで議論しあうこと」なのだろうと思います。皆が同じチームの一員である当事者意識を持って！

二つ目の鍵～重層的でフラットな関係性～

高齢者介護業界で俗に言われる連携への課題の代表格は、「医師は敷居が高くて連携が取りづらい」。その原因を探りますと、もうすでにこの時点で「医師のせい」にしている私達。この私達こそが、無意識に備えている自分の中の気位の高さが大きく要因していることに、全ての職種が気がつかない限り、また、それに気づいて原点に戻らない限り、たまねぎのように重層的な関係性は構築されないであろうと思われ、私自身、反省しきりでもあります。

普段私達が「連携を図る」と称してもつ話し合いというのは、支援をさせて頂く方に関わるチームの最終責任をとって頂く方の存在確保のし合いです。これは「連携」とは意味がかけ離れていますね。

しかしながら、もともと看護師の方々はコミュニケーションスキルが高いですし、セラピストの方々も、介護職の方々もコミュニケーションスキルがかなり高いのです。

「連携を図る」と称された文化を覆せないだけで、本当は合意形成の図り方もしっかり現場で訓練されているのです。

三つ目の鍵～人材～

現在、介護業界で叫ばれている「人材確保の必要性」の「材」の意味は、「量（頭数）」のことではなく「質（能力）」のことであることは、雇用する経営者サイドは痛感されていると思われまます。これは介護業界に限ったことではないであろうとも思っております。

私にとりましては、ご講義のなかの産業系との比較がとてもありがたいものでした。終盤の質問者様の「その比較は無理があるのではないか・・・」という視点も一理あると思われまますが、一般のサービス業界と福祉業界を経験されている方であれば、堀田先生の両者比較は容易に理解できる方が多かつたのではないのでしょうか。

そしてその能力だけは自分で鍛えるしかないことも、私達は棚に上げているのですよね。少なくとも、私はそれを重々自覚しております。誰かのマネごとをしてみても、誰かが教えてくれるのを待っていても能力は身につかないということ。

「能力を鍛える」という表現は、とても偉そうな感じがしてしまうのですが、これを「技量の高さ」と置き換えてみますと、どのような部門においても「簡単（ノウハウ）」の積み重ね＝「技量の高さ」なのではないのでしょうか。医療業界では「神の手」といわれる方も実在されていますが、医療、介護技術の部門に限らずあらゆる分野で共通していることなのではないかと思っております私は、浅はかすぎますでしょうか・・・。

四つ目の鍵～地域～

堀田先生のいう「高いサービスを提供しているところが評価される」これこそが、究極の平等なのではないのでしょうか。努力を積み重ねたことが評価されるわけですから！

そして、さらに掘り下げてみますと、その評価をするのは誰であるかということが重要となると思えるのですが、それこそが国ではなく、地域であろうと思えてやまないのです。

自分達がどのような努力をすることで、地域の中でどのように存在できるのか。未だ、こういう努力は人から言われてやることでもないという空気が読めていない私達なのですが・・・。

堀田先生。本日は貴重なご講義を本当にありがとうございました。